

第35回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会 研究フォーラム 鹿児島大会の記録

鹿児島大学生涯学習教育研究センター 小栗 有子
酒井 佑輔

平成25年9月24日～25日の日程で、鹿児島大学を会場にして第35回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会・研究フォーラムを開催した。2日間に共通するテーマは、「大学生涯学習の過去・現在・未来」で、サブテーマとして1日目は、「地域とともに描く 生涯学習の近未来像」、2日目は、「大学改革における生涯学習系センターの使命と役割」を設定した。以下に、二日間の開催趣旨と開催報告、並びに、成果と課題について報告する。

1. 第1日目の開催趣旨

(1) 趣旨(鹿児島県民向け)

鹿児島大学では、このほど日本の大学では初めての取組みとして「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定した。そこでは、大学が実践する生涯学習として以下を位置づけている。

- ・社会人学生・社会人の学び直しの位置づけの明確化
- ・学生教育の位置づけの明確化
- ・一方的に大学が与えるのではなく大学人も地域から学び学問の鍛え直しにつなげる

また、鹿児島大学の考える生涯学習の理念を次のように定めた。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。

シンポジウムでは、鹿児島大学が以上の内容を今後全学挙げて実践していくために、具体的に何をどのように取り組んでいけばよいのかについて、現状の課題と今後の見通しについて、地域とともに考えていきたい。また、今回の

シンポジウムには、全国の国立大学法人の生涯学習系センターの教職員が50名弱も参加する。

(2) 趣旨(会員大学向け)

鹿児島大学における生涯学習憲章の策定プロセス、並びに、その後の地域との対話を一つの事例にして、大学生涯学習のあるべき姿と生涯学習系センターの担うべき使命や役割について検討し、翌日の分科会、及び、全体討議につないでいく。

2. 第2日目の開催趣旨

6つの分科会を用意している。その理由は、生涯学習教育研究センターの改編が進む中、改めて「生涯学習系センター」のミッションや役割は何かを再定義、確認していく必要があると考えたからである。大学改革の中で、「生涯学習系センター」の固有のミッションや役割をどこに設定するのが問われている。

6つの分科会テーマは、会員大学の「生涯学習系センター」の活動や役割を概ねカバーできると考えて設定した(本協議会の理事会で承認)。また、これら6つのテーマは、生涯学習教育センターの改編後にできた組織の性格によって、重点化がやむなく進むことが予測される。

木村北海道大学教授(前当研究協議会会長)の組織改編の動向整理では、①高等教育開発部門と統合した大学(センター)、②地域連携(産官学連携)部門と統合した大学(センター)、③教育開発部門・地域連携部門両方と統合したセンター、④生涯学習教育研究センターを残す大学(センター)の4つに分類している(表1)。

〈表1〉平成25年5月

①高等教育開発部門と統合した大学(センター)	北海道大学、岐阜大学、徳島大学、香川大学、大分大学
②地域連携(産官学連携)部門と統合した大学(センター)	岩手大学、福島大学、宇都宮大学、富山大学、金沢大学、静岡大学、滋賀大学、奈良女子大学、和歌山大学、鳥取大学、山口大学、高知大学、長崎大学、熊本大学、宮崎大学
③教育開発部門・地域連携部門両方と統合したセンター	北海道教育大学、大阪教育大学
④生涯学習教育研究センターを残す大学(センター)	弘前大学、茨城大学、香川大学、鹿児島大学、琉球大学

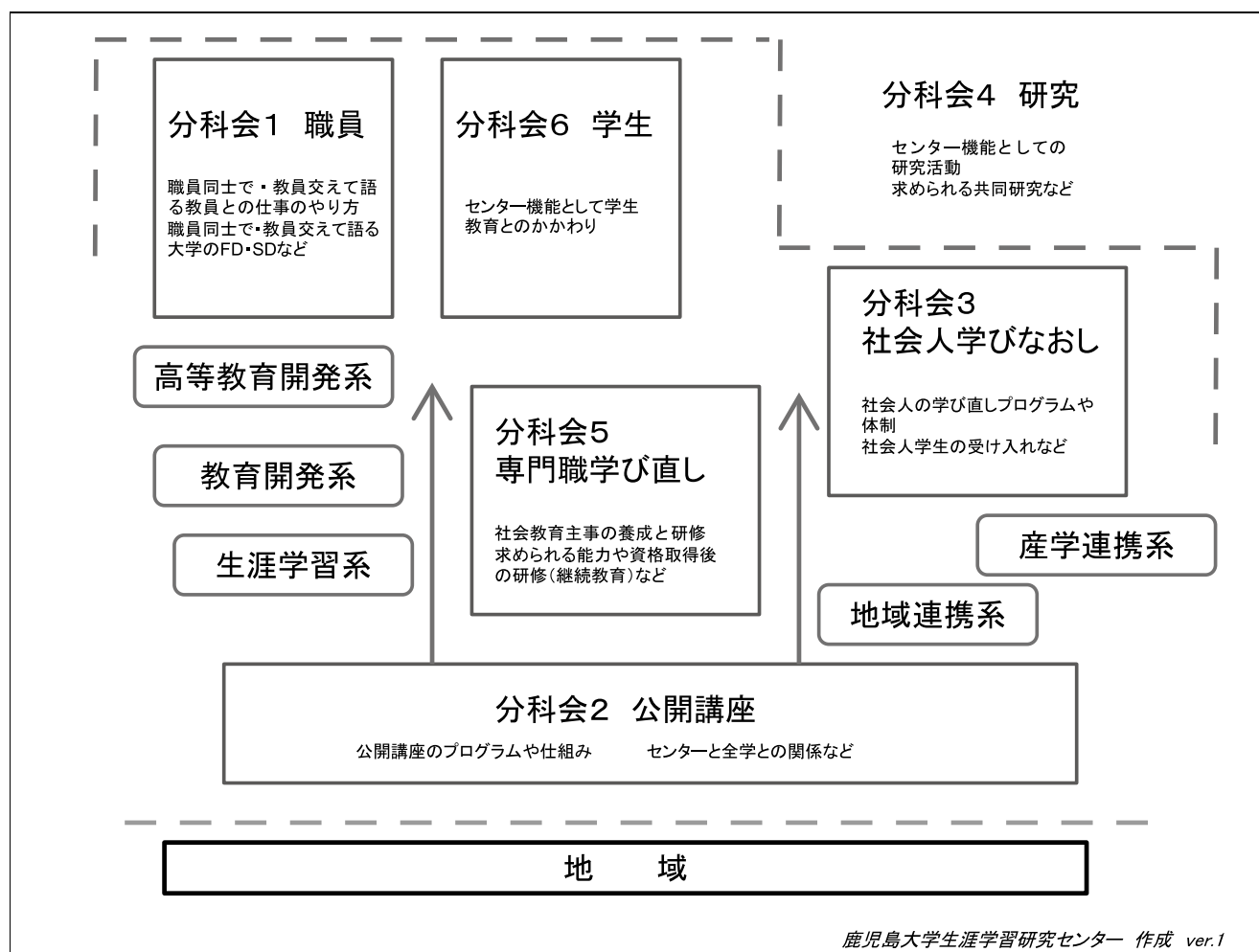
下記の〈表2〉は、今年度の承合事項(1)の回答に基づき再分類したものだ。木村教授の動向分類に修正を加え、「②地域連携(産官学連携)部門と統合した大学(センター)」を「生涯学習教育研究センターと地域連携部門」と「生涯学習教育研究センターと産官学を含む地域連携部門」の二つに分けた。また、②をさらに二つに分け、奈良女子大学を位置づけるため、事実上生涯学習部門をなくした部門を②-2とした。

再編した理由は、「生涯学習系センター」の活動や役割(その幅や質)に今後変化が生ずる可能性が否定できないからだ。〈図1〉は、改編後の組織の性格ごとに特化していくテーマをイメージとして示すものだ。これをセンターの多様化と見るならば、同時に「生涯学習系センター」の共通項をどこに求めるかの確認が肝要だ。その発見が、今回の分科会の趣旨・目的である「生涯学習系センター」の固有のミッションや役割を考える素材になるはずだ。

〈表2〉平成25年9月

①高等教育開発部門と統合した大学(センター)	北海道大学、岐阜大学、島根大学、徳島大学、大分大学
②-1生涯学習教育研究センターと地域連携部門と統合した大学(センター)	宇都宮大学、富山大学、金沢大学、和歌山大学、熊本大学、宮崎大学、(香川大学)
②-2事実上、生涯学習部門をなくす	奈良女子大学
③生涯学習教育研究センターと産官学連携部門を含む地域連携に統合した大学(センター)	福島大学、静岡大学、滋賀大学、鳥取大学、高知大学、長崎大学
④教育実践総合センターと統合したセンター	北海道教育大学、大阪教育大学
⑤生涯学習教育研究センターを残す大学(センター)	弘前大学、(香川大学)、鹿児島大学、琉球大学、(茨城大学)

〈図1〉



鹿児島大学生涯学習研究センター 作成 ver.1

今年のテーマは、これまで扱っていない研究(分科会4)を取り上げる。これには二つの意味がある。一つは、個々の教員の研究テーマと多様化するセンター業務との関係を整理する点にある。もう一つは、「生涯学習系センター」に固有のミッションや役割を追究するために必要な研究課題の設定である。

学生教育(分科会6)も新たなテーマである。今後「生涯学習系センター」が、学生教育の中で果たすべき役割は高まることが予測できる。その時にセンターが考えなければいけないことはなにか。たとえば、学生と地域とのかかわりや、本学の場合で言うと、学生と大学職員との関係のなかに検討課題がみえている。

今年は、大学職員主導の分科会(分科会1)を設けた。それにも理由がある。これまでの教職協働は、教員側や地域側の事情や視点で語られることが多かった。今回はもっと職員の本音や立場からテーマを考えてみたい。職員のキャリアパスや人事評価制度、職員の学習環境の整備などは本学の職員が提起した問題である。

専門職(社会教育主事)の養成(分科会5)も今回新たなテーマだ。実際に養成にあっている大学の有無や、かかわり方の程度など不明な点が多い。「生涯学習系センター」に固有のミッションや役割と呼ぶには、会員大学間で共有していない活動実態や課題が多い。

以上4つの分科会に比べ、社会人の学び直し(分科会2)や公開講座(分科会3)は、これまでも頻繁に協議してきたテーマだ。今回は、大学改革という文脈を意識することで、各々のテーマに対する「生涯学習系センター」に固有のミッションや役割を考えてみたい。

分科会2と分科会3は、それぞれ「生涯学習系センター」が単独、もしくは、学内外の組織と連携して実施するものと、他部局がやるものに分けられる。いずれも制度設計やプログラム作りなどを要するが、大学改革を意識することは、何の目的や必要によって行うのかを問うことを意味する。同時に、大学の他部局との関係で「生涯学習系センター」が何をするのかを問うことである。

以上が、今回の趣旨に基づく各テーマへの問題提起である。

進行は、各ファシリテーターにお願いしたい。分科会の時間は130分で、その後全体討論会を行う。全体討論会では、各班3分で、テーマに対する「未来型の課題」が何かを発表してほしい。「未来型の課題」とは、「生涯学習系センター」がめざす方向性を踏まえた課題のことである。「未

来型の課題」に至った経緯は、時間の関係上、発表では省略いただきたい。そのかわり、記録係りの方に記録をお願いしたい。理由が気になる場合は、限られた討論の時間の中で質問いただくことにしたい。全体討論会の方向性と狙いは、「生涯学習系センター」に固有のミッションと役割について議論を進めることにある。

3. 公開シンポジウム「地域とともに描く生涯学習の近未来像」大学生涯学習の過去・現在・未来の報告

本学は、9月24日、全国国立大学生涯学習系センター研究協議会と共催で、公開シンポジウム「地域とともに描く生涯学習の近未来像」大学生涯学習の過去・現在・未来を開催した。これは、日本の大学では初めての取り組みとなる「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定したことを記念して開かれたものである。会場の南日本新聞会館みなみホールには、教職員や一般聴講者など約160人が集った。

まず初めに、全国国立大学生涯学習系センター研究協議会会長の木村純氏が開会の挨拶を行い、前田芳實学長が開催校挨拶を、文部科学省生涯学習政策局長の清木孝悦氏が来賓挨拶を行った。



基調講演では、東京大学大学院教育学研究科教授の牧野篤氏が「大学と地域はこれからどこへ向かうのか～「社会」をつくりだす生涯学習を求めて」と題し、取り組み事例を紹介しながら、大学と地域がどのようにして“つながり”を持ち、学びを通して“新しい価値”を創っていくのかなどについて話がなされた。

続いて、鹿児島大学生涯学習センターの酒井祐輔講師が「鹿児島大学生涯学習憲章」の策定について報告をおこなった。この憲章は、地域とともに発展する柱として生涯学習を位置づけ、「地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学が目指す生涯学習とは、地域に生きる人々と大学人が共に学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくこと」だと解説した。



その後、岩元泉鹿児島大学生涯学習教育センター長をコーディネーターに、前田学長を含む8人がパネリストとコメンテーターとして登壇し、本学が目指す生涯学習の実現に向けて、地域と大学が共に学び合い、いかに成長するのか、現状の課題と今後の見通しについて議論をおこなった。登壇者から提起された論点は以下のとおりである。



まず、第一の論点は、学校教諭や教育行政の経験が長い指宿市長の豊留悦男氏が提起した「生涯学習の振興にかかわる自治体長と教育委員会の関係」と「政治的課題を大学の知のネットワークで解決していく生涯学習のあり方」であった。第二は、アメリカに21年の在住経験をもつ瀬上印刷(株)代表取締役社長の門田晶子氏が指摘した「焼酎

など地域の産業の特色をいかした大学の教育研究あり方と産業をつなぐよい循環」についてであった。第三は、鹿児島県本土から380キロ南に位置する喜界島で有機の島をめざして黒糖焼酎づくりに励む朝日酒造(株)取締役の喜瀬浩之氏が語った「輸送コストや医療など島の切実な課題と自然や文化など島の潜在力に大学がかかわることの可能性」で、最後の論点は、鹿児島大学保健学研究科第1期生の鹿児島県立始良病院総看護師長の下野義弘氏が力説した「理論(学問)と現場(経験)が結びつくことで仕事の幅と質が高まる学び直しの効果と課題」であった。



以上の議論を受け、前田学長は「生涯学習憲章を初めて制定したフロントランナーとしての責任がある。生涯学習の表彰制度をしかけるなどいろんなアイデアを地域の方にも助言いただき、全学を挙げて生涯学習機能を高めていきたい。」と答えた。最後に、コメンテーターの牧野氏が「住民が主役となる活動を今後、大学がどこまで受け入れ変わることができるかが問われている」とまとめ、盛会のうちに終了した。

4. 第35回全国国立大学生涯学習系センター研究協議 分科会報告

前日の公開シンポジウムの議論を受けて、翌9月25日に全国国立大学生涯学習系センター研究協議会の研究フォーラム2日を開催した。当日は、鹿児島大学生涯学習教育センター小栗有子准教授より趣旨説明があり、大学改革のなかで「生涯学習系センター」固有のミッションや役割を再定義することを目的に6つの分科会に分かれて討議することが提案された。6つとは、①職員、②社会人の学び直し、③公開講座、④研究、⑤専門職(社会教育主事)学び直し、⑥学生の分科会で、全9班、計52名の参加者

を得て130分の議論を行った。

最後の全体会では、各班より分科会で明らかになった「未来型の課題」（「生涯学習系センター」が目指す方向性を踏まえた課題）の報告を受け、「生涯学習系センター」に固有なミッションと役割をテーマに全体討論を行った。

(1) 分科会の記録

各分科会で確認した内容を下記に示す。

①分科会1:職員

①-1分科会1-A

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・地域のニーズと大学とのつなぎ役、学内のワンストップ化

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・地域の課題を見つける力もった人材を育て、それを地域に返す。そのなかで、事務職員としては、地域からの人材を受入れ、お互いに関わりあい、お互いが刺激を受け合って地域に返す。
- ・大学全体の教職員の理解を得ていくこと。その中で、職員としては、大学の地域連携をすすめながら、その業務を通して職員が成長できること。それを大学全体で理解することが求められる。

■結論に至った経緯・理由

- ・地域の課題を地域住民自身が見つけ出すことを手助けするのが、生涯学習系センターの役割である。そこで、地域自治体等からの職員を受入れ、大学の事業の企画やコーディネートと共にしていくことを通して、地域の課題を見つけ出す力を育て、地域に返すことを通じて地域貢献を行うことが重要である。
- ・事務職員としては、事務職員だけではできない、教員だけでもできない、教職協働が重要であって、連携、コーディネートする力をつけていくことが大事である。

①-2分科会1-B

■確認した共通の課題

- ・地域ニーズの正確な把握と、それに基づく事業展開が重要である。
- ・市場原理による公開授業の提供者、公開講座の担当者は偏っている現状

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・地域とのネットワークは職員、教員の双方が持っている。その地域のネットワークを共有し、それをつないでいくことが課題。
- ・職員には人事異動があるため限られた年限でどこまでできるのか、また引き継ぎができるのか。専門職員として長期的な配置をした場合、それは職員の組織内でのキャリア形成に有効なのか、あるいは、阻害してしまうかの判断

■確認された分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・学内の認知度を高めていくこと。地域連携・貢献部門の経験者が少ないことの影響もあり、認知度を高めるようなSD研修、FD研修の充実を図るべきである。
- ・地域連携とは何か、生涯学習に大学が関わることの意義について共通認識を図ることが大事である。
- ・かつて総務課で対応してきた業務が、窓口の一本化により地域貢献部門に多く流れてきている。十分な対応をするためには、組織を改編して新たな大学事務体制を構築することが必要である。

②分科会2:社会人の学び直し

②-1分科会2-A

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・大学全体、部局の教育研究の発展に寄与すること
- ・公開講座をきっかけに社会人入学につなげる。社会人学生研究を進め、部局の社会人教育を充実させること

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・社会人の学び直し事業を通じて、いかに部局の教育研究の向上に貢献するか。
- ・大学の生涯学習機会を利用する人が特定化、固定化している現状に鑑み、学習者を不特定化していくために、20

代～40代の若手の社会人の学びの機会を戦略的に追究していくことが課題である。

- ・大学の事情がそれぞれ違う中で、部局間の連携が大事である。

■結論に至った経緯・理由

- ・組織・人員体制上、生涯学習系センター独自やれることは限られている。センター設置の意義を学内に認知してもらうためには、大学の教育研究の向上への寄与が重要である。

②-2 分科会 2-B

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・大学の知や価値をどう地域に届けるか？
(マニアのための生涯学習にならないために)
- ・「学ぶ」喜びをどう伝えるか？
(社会人と一言に言っても、退職した高齢者と現役世代の職業人を同列に議論しては幅広になる。したがって、現役世代の職業人に絞って検討する。)

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・地域のニーズをどう集めるかは大きな課題で、大学の敷居が高いといわれるなか、生涯学習系センターにいる我々、コーディネーターが自ら地域に入り、地域の実情を知り、地域の実情にあった講座を企画していく。コーディネーターがコーディネーターで終わるのではなく、プロデューサーとして企画していくことが重要である。
- ・独自性のあるコンテンツ作成に加えて、それをどう社会に届けるか。また、有名大学の無料のオンライン授業とどう差別化していくかも重要になってくる。
- ・オンラインで配信した講義をきっかけに、これまで大学に来なかった方たちが来たくするようなコンテンツを企画することも必要になってくる。

③分科会 3: 公開講座

③-1 分科会 3-A

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・大学公開講座の在り方について明確な方向を示す。

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・公開講座は、常に発展系である(公開講座から公開授業へのシフト例)。センターが将来どういう役割を担っていくか。地域の中で大学がどうあるべきかが一番のポイントである。
- ・その上で、自治体との連携だったり、公民館事業と大学の公開講座、授業公開と連携など調整をしていく。
- ・センターが地域のシンクタンク、コンサルタントの機能を担いながら、地元の自治体の政策と結び付きながら提案していく。そこまでお手伝いする専任教員が常駐しながら戦略的にしていくことが今後問われてくる。

③-2 分科会 3-B

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・学内の情報の集約、広報
- ・(研究協議会としての)生涯学習にかかわるデータの収集と分析

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・公開講座に関する全国的な共同研究と成果の実践への反映を行うべきである。

■確認された分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・現在、学内外からの生涯学習系センターの存続の論理的説明が求められている。それに対して我々は論理武装をしなければいけない。そのためには定量的なデータと定性的なデータの検討が必要である。それらは、大学の各センターの研究だけでは進まない。共通フォーマットが必要で、この全国国立大学生涯学習系センター協議会において共同で研究するのがよい。

④分科会 4: 研究

■確認した分科会テーマに関する共通の課題

- ・組織人(専任教員・関連教員)としてやるべきことと、キャリアをもつ研究者として、一人の人間としてアイデンティティの相克がある、そこがなかなかマッチしない。
- ・センターは規模が小さく、周辺にあってフットワークが軽いので、大変なこともあるけど、面白味がある。研究でも最先端のことができるのではないかな。

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・センターには、生涯学習を専門にする人もいるが、そうではない人もおりいろんな分野の人が所属している。その各分野の専門を協議会にもちよって、ホットな話題をレビューして、そこから生涯学習や地域連携につなげていけるようなテーマをプランニングする。
- ・新しい研究の開発や、しいては、新しい研究者像を開発していく。
- ・生涯学習系センターというマージナルな現場で、リアルな地域と現場と接しながら、そこで新しいシーズを見つけて、さらに新しい研究のフレームワークをみつけていく。そういう新しい研究者像を開発していく、創造していくということを今後の生涯学習系センターの議論としては必要である。

⑤分科会5:社会教育主事・専門職学び直し

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・社会教育主事の養成講習を質高くやる。
- ・工夫をして講習自体の質を高めることも大事だが、それに加えて、講習した人のフォローアップがどれだけできているのかの問題を追求する必要がある。
- ・養成の部分と研修、さらにどうやって配置されるのかという問題など、社会教育主事がどのようにネットワークとして結び付き、一緒に活動していくのか。その辺をつないでいくのもセンターの役割として必要なのである。
- ・主事だけではなく、もっと非常勤の職員の多い、公民館主事に対してどのような支援ができるのか、社会教育委員にどのように専門性を持って考え、提言してもらうのか。NPOがどう関わるのか。というところというと、全部専門職とは言えないけど、いろいろな力量をアップしていくための支援が、センターの役割になってくる。
- ・総合行政として社会教育の位置付けが変わり、社会教育主事が変わるかもしれないという大枠の中で、存在価値のある専門性をもつ社会教育主事や社会教区主事関連職員を養成し、その意義を認めてもらうことが課題である。

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・議論の時間が足りず、継続した議論をするテーブルをつくる必要がある。各大学の取組みの事例HPにアップして、議論するページが立ち上がり、共同研究に続き、政策提言につながるような取組みをしないといけない。

⑥分科会6:学生

■確認した「生涯学習系センター」の使命と役割

- ・生涯学習系センターにおける学生との係わり方は多様である。

■確認した分科会のテーマに関する「未来型課題」

- ・共通言語の形成が課題である。センターはそのあり方を問わず、大学の教職員や学生を支援する以上、その変化、変容、成長といったものをしっかりと見届け、その状態を記録、記述する役回りを担うことが必要である。

■結論に至った経緯・理由

- ・大学がやる以上、教育的意義を学生にも周囲の関係者も納得させることが必要である。そのうえで、地域や大学、教員にも利益があるという win-win の関係をうまくつくりたいといけない。
- ・センターは実践側になりすぎず、研究機関としての機能でもって意義をはっきりと示せる方がよい。

(2)全体討論の記録

全体討論で確認した論点と意見は次の通りである。

■職員組織をうまく活かすセンター

- ・職員（ライン:組織としての意思決定）と教員（スタッフ:自由な発想で教育・研究・事業に従事）の仕事の仕方や意思決定の仕組みが違うので、両者の関係をうまく組み合わせることで、生涯学習教育研究センターは十全に機能するのではないか。ラインをうまく活かすセンターになることが目指す方向性の一つではないか。

■教員の個々の専門をセンターに活かす（新しいフィールドをクリエイトする）

- ・ラインとスタッフの関係は、センターの教員自身の中にもある。つまり、センター業務を担う組織人としての自分と、研究者としてトレーニングを受け専門分野をもつ職業人としての自分というアイデンティティの相克がある。二束のわらじのうち、センター系協議会にはこれまで組織人としての草鞋しかはいてこなかった。これからは、それぞれがもっているアカデミックなバックグラウンドを生かすような議論をすべきである。

■国立大学系センターだからこそできること

・大学によって状況がことなるが、共通するのは、学内との調整と学外の調整の「窓口」的な役割をセンターが担っていることである。また、私立大学と国立大学では、公開講座でできることとできないことの違いを踏まえて、国立大学の生涯学習教育系センターだからこそできることがポイントになる。それらを今後継続的に情報共有していくことで、いろんなノウハウを生み出していける。

■大学によって生涯学習の中身は違ってよい

社会教育・生涯学習を専門にしている人と、全然違う分野から来ている人の二つがある。それはどちらがいい悪いではなく、自分たちの特色を生かしたものを作り上げていくしかない。大学によって同じ生涯学習と名乗っていても中身が全く違っていてもよい。

■全国的な共同研究をおこなう

大学の置かれている状況はかなり違うが、公開講座に対するニーズの全国的な傾向など定性的にわかる生涯学習に関するデータ収集も必要である。一大学で実施するのは無理なので、全国国立大学生涯学習系センターにおいて全国的な調査研究を行い、その結果を各大学にフィードバックする。さらにそれぞれの大学において公開講座の在り方を考えていくべきではないか。

■部局に関わることを通じて存在価値を生み出していく

それぞれの大学の置かれている状況は全然違うが、共通点は、すでに部局がいろんな活動をしていて、センターが単独でやってもたいしたことにはならないということだ。そこで、逆にセンターがどうかかわるのか。そこに存在価値を生み出していけばいい。たとえば、部局に関わる中で、社会人学生のありようを研究していく（どう増やしていくか、社会人教育の効果をどうあげていくのかなど）。公開講座にももう少しFD的な機能を入れるなど、部局に関わることで貢献していけることがもっとある。

■実務に近いセンターだからこそ議論すべき「そもそも論」

センターは、どうしても目先の仕事に追われ、対処療法的な議論にとどまりがちなので、センター系協議会ではそもそも論をやるべきだ。学会でもやるべきことだが、

実務に近いセンターだからこそ論じられることがあり、論じる必要もある。たとえば、今回の議論には「関係」が重要なキーワードで、関係を作ろうという議論はするけど、そもそも「関係」とは何かという問いこそが大事なのではないか。

■大学と地域との「関係」を研究のテーマに（細かく観察）することが大事

いろんな関係が絡み合うところのプラットフォームのような役割を果たしているのが生涯学習系センターである。どういう関係が望ましいのかという議論が、研究として必要である。大学と地域をつなぐとことがどういうことを意味するのかをもっと具体的に深めていかないと、関係についての議論が抽象論にとどまってしまう。地域の中に大学があると思うのか、それとも大学が中心でその周りに地域があると思うかで全然違ってくる。学生が目的で地域が教育のための手段なのか、あるいは、学生が地域発展の手段で地域が目的なのか。両面を見据える必要がある。そのことは、研究だけでなく実践としても意義深い。

■インターフェースという役割を果たし、生涯学習の研究を行う

センターが、インターフェースという役割をきっちりやっていくことが、全学的にとってもいい仕事になる。それと同時に、研究をしっかりやっていく。センターは果たす必要がある。二つの腹をもつ我々は、自分の研究もあるけど、生涯学習の研究をきちんと果たしていくことが、センターがある意味発展していく契機になっていくのではないか。

■大学が社会的に果たしていく役割の中に公開講座を位置づけていく

公開講座のもつ意味や大学が地域の中で果たしていく役割、大学と地域との関係性など、大学が社会的に果たしていく役割が何かを戦略的にとらえ直す中で公開講座を位置づけていくことが必要だ。

■協議会として共同研究を推進することが大事である

公開講座を通して参加した住民がどう成長したのかという実証的な研究も必要だ。生涯学習は専門家をお願いしますということになりがちだがそうではない。そのような人たちの連携をしながらセンター系協議会の共有財産として蓄積していけるように、そのような調査のための共通フォーマットを作るとか、共同研究を協議会として推進し、追及していくことが大事である。

■お互いの違いを知ることで全体が見え、センター間の連携のあり方が見えてくる

ここに集う関係者の専門性はバラバラで、大学が置かれている状況もバラバラである。その違いを確認することが出発点で、今回確認した状況や課題の組み合わせの中に存在している。全体が見えてくると、逆に個々のセンターの位置がもう少し見えてくる。そうすることで、センターの持っているそれぞれの強みや弱み、お互いの持っていないことやできないことを補う関係も見えてくる。

■自分たちの仕事を研究することでセンター像が見えてくる

それぞれのセンターはプラットフォームだったり、インターフェースだったり、それぞれ特有の機能を発揮している。それはそこで仕事をしている教職員に依る部分が多い。そこで、われわれの専門分野や関心、パーソナリティ、ネットワークなど、自分研究を行い、それを出し合うことでセンターや社会貢献の類型化が図れるのではないか。

■継続的な議論の場としてHPを活用し、文科省の提言や共同研究につなげる

研究フォーラムは、これまで議論の言いっぱなしで、議論の継続性に欠けるといった指摘があった。鹿児島ではこれらの改善をめざし、さらに共同研究の模索についても協議され、協議会としての到達点が鹿児島で改めて確認ができた。そこで、ホームページの活用からまず入りたい。今後は、フェイスブックによる日常的な交流や研究のストックなど、センターのそれぞれの持ち味を生かし、相互に生かしあう。それらを蓄積する中で、文科省への提案や共同研究の実現可能性についての展望を持っていきたい。

■文科省との意見交換を実りあるものにするためには、下積み
の議論が必要

二年前から文科省との協議が始まった。しかし、協議会の中でも議論がなかなか深まっていけない中で、文科省との意見交換や対話というのも難しい。まずは、協議会のなかで課題の共有だったり、方向性の確認をもっとしていくことが必要である。

(3) 成果と課題：次のステップに向けて

分科会で明らかになった生涯学習系センターの「未来型の課題」は以下のとおりである。

- ① 教職協働の中身を具体的に深めること：どんな体制で、何をするのか？たとえば、事務系の「ライン」と教員系の「スタッフ」の両者を生かす体制や両者のネットワークを生かす方法等。
- ② 地域のニーズを把握する方法とそれに基づいて事業展開する。たとえば、社会教育主事など専門職や職業人向け学び直しや各種公開講座などの生涯学習事業を含む。
- ③ 大学と地域がつながることの意など「そもそも論」を問い、具体的に深める。たとえば、学生教育の手段としての地域連携か、それとも地域発展自体が目的か。センター教員の学問的専門性をどう生かしていくのか等。
- ①～③にそれぞれ取り組んでいくためにも
- ④ センター系協議会として着手する「共同研究」のテーマの検討、設定が必要である。また、同時に、「共同研究」を進めるための体制や予算の確保、公開の方法などのスキームを検討する必要がある。

今回最終的に確認したことは、地域のニーズと大学のつなぎ役としての「生涯学習系センター」の使命と役割があるということだ。また、「つなぎ方」の基本としては、大学が地域のニーズを把握し、それに基づく事業展開ができる人材の養成や環境の整備を行うことである。以下主な論点である。

- ① 地域の課題を見つける力を持った人材を育て、その人材を地域に返す
 - ・方法1：自治体等の職員を大学に受け入れ、大学事業の企画やコーディネートを一緒にやり、職員も含めて業務を通じて共に成長していく。そのことを大学全体の教職員の理解を得ていくことの大切さ（SD研修、FD研修等）
 - ・方法2：社会教育主事専門職の養成講習、専門職のネッ

トワークとフォローアップ

② 新たな研究開発、研究者像の開発

・各専門分野から生涯学習や地域連携につなげていけそうなテーマの計画（リアルな現場や地域と接しながら、そこから新しいシーズを見つけ、研究の新しい枠組を創造していく）

③ 「大学と地域をつなぐ生涯学習・地域貢献」の研究とその成果の還元

- ・例1：学生と地域、教職員がつながることの教育的意義を明らかにする
- ・例2：社会人の学び直しや社会人学生の置かれた課題など必要な研究課題の設定
- ・例3：公開講座を発展させるための定量的・質的データの収集と解析

第35回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会
第2日目分科会名簿

大学名	所属・職名	名前
分科会1 職員A		
北海道大学	生涯学習計画研究部門／教授	木村 純 (★)
弘前大学	研究推進部 社会連携課長	山田 修平
静岡大学	学術情報部研究協力課 研究支援係員	高村 知世
和歌山大学	社会連携課 課長補佐	杉山 哲也
鳥取大学	社会貢献課長	梅原 徹
大分大学	学生支援部教育支援課 教育企画グループ	池田 耕一
分科会1 職員B		
香川大学	センター長／教授	清國 祐二 (★)
茨城大学	専門職員	三浦 東
富山大学	社会貢献グループ員	平野 美沙希
金沢大学	総務部総務課 生涯学習係長	小山 久美子
宮崎大学	地域連携推進課長	我那覇 生治
鹿児島大学	講師	酒井 佑輔
分科会2 社会人の学び直しA		
大阪教育大学	准教授	出相 泰裕 (★)
北海道大学	准教授	亀野 淳
岐阜大学	生涯学習システム開発研究部門／教授	森田 まさ裕
静岡大学	地域連携生涯学習部門長／教授	阿部 耕也
鳥取大学	生涯学習係長	植田 美穂子
宮崎大学	准教授	山田 裕司

分科会2 社会人の学び直しB		
熊本大学	教授	都竹 茂樹 (★)
滋賀大学	准教授	横山 幸司
和歌山大学	副センター長 ／システム工学部／教授	床井 浩平
高知大学	地域連携・再生部門長	吉用 武史
長崎大学	准教授	新田 照夫
分科会3 公開講座A		
富山大学	教授	藤田 公仁子 (★)
静岡大学	地域連携生涯学習部門 ／准教授	石川 宏之
滋賀大学	教授	神部 純一
和歌山大学	長期社会体験 研修員	栗本 千香代
徳島大学	学務部教育支援課 生涯学習係長	古田 克治
鹿児島大学	センター長／教授	岩元 泉
分科会3 公開講座B		
徳島大学	教授	馬場 祐次郎 (★)
北海道大学	博士研究員	佐藤 祐介
弘前大学	准教授	藤田 昇治
鳥取大学	講師	前波 晴彦
島根大学	センター長	多々納 道子
分科会4 研究		
宇都宮大学	准教授	佐々木 英和
北海道大学	准教授	三上 直之
福島大学	副センター長／准教授	木暮 照正
茨城大学	准教授	長谷川 幸介
富山大学	准教授	仲嶺 政光
鳥取大学	准教授	清水 克彦
分科会5 社会教育主事・専門職学び直し		
金沢大学	教授	浅野 秀重 (★)
和歌山大学	センター長／教授	村田 和子
	生涯学習推進課 生涯学習推進係 専門職	おお 幡 奈津
北海道教育大学	生涯学習・地域連携部門セ ンター員／准教授	こん 今 尚之
大分大学	准教授	おか 岡 田 正彦
分科会6 学生		
北海道教育大学	生涯学習・地域連携部門セ ンター員／准教授	お 小 北 麻記子 (★)
弘前大学	講師	ふか 深 作 拓郎
和歌山大学	講師	にし 西 川 一弘
和歌山大学	社会連携課 生涯学習係主任	かわ 河 合 敏博
鳥取大学	地域貢献・生涯学習部門長 ／教授	ど 土 井 康 作
鹿児島大学	准教授	お 小 栗 有 子

★ファシリテーター